様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００１５６

研究課題名（和文）暗黒舞踏を芸術的カテゴリーとして確立するための実証的研究

研究課題名（英文）Research for Establishing Butoh Dance as a Category of Art through Field Investigation

研究代表者
小菅　隼人（KOSUGE, Hayato）

慶應義塾大学・理工学部（日吉）・教授

研究者番号：４０２４８９９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：暗黒舞踊ー暗黒舞踏ー舞踏（BUTOH)と名前を変えながら，1950年代末から，二人のパイオニア（土方巽，大野一雄）とその周りに集まった芸術家によって切り拓かれた，日本発の前衛芸術は，海外での知名度と熱狂的な人気に比して，日本国内での研究状況においては，いまだ明確な学問分野としての認知を得ていない．本研究では，すでに殆どが70代以上となった草創期の舞踏家との直接対話と，その記録公開によってあらたな舞踏資料を構築するとともに，研究上映会，舞踏公演，ワークショップを実施することで研究者コミュニティを構築することを目的とした．コロナ禍ではあったがこの目的は概ね実行できた．

研究成果の学術的意義や社会的意義
　1950年代から活躍し始めた舞踏家達が次々と亡くなっている中で，舞踏家達の直接的な証言は，これからの舞踏研究にとって一次資料となるはずである．それは単なる記録であるだけではなく，舞踏家達の肉声と人となりを伝える目的も持っており，それが，舞踏の本質的な部分にあることを新たに主張したことに学術的オリジナリティがあったと考える．
　さらに，日本が，能，文楽，歌舞伎などのいわゆる伝統芸能だけではなく，前衛芸術においても1950年代から世界最先端の表現を発信し続け，それが現在においても継続していることを，社会に訴えることにおいて社会的意義があったと考える．

研究成果の概要（英文）：The Japanese avant-garde art Ankoku-Butoh has started by two pioneers, Tatsumi Hijikata and Kazuo Ohno, and their friends and disciples. Their artistic values, however, remain relatively unrecognized in Japan in contrast with their international renown and fervent popularity abroad. This study aims to establish research resources as a genetic archive engine by conducting direct dialogues with the pioneering Butoh artists, most of whom are now in their seventies or older.
　Original dialogues with Butoh artists making their records publicly available are to construct new Butoh resources. Moreover, the study endeavors to foster a research community through research screenings, Butoh performances, and workshops. Despite the challenges posed by the COVID-19 pandemic, these objectives were largely achieved.

研究分野：芸術学

キーワード：暗黒舞踏　土方巽　北方舞踏派　鈴蘭党　大野一雄　ビショップ山田　前衛芸術　BUTOH

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の学術背景としては，同時代の前衛文化と大衆文化を分析した *Discourses of the Vanishing: Modernity, Phantasm, Japan* (1995) のように，同時代の社会背景と時代精神の研究を中心におこなったものと，後述するように，舞踏そのものの価値を芸術批評として研究したものに分類できる．本研究では，舞踏を時代性の視点から考究する．

1960 年代に反体制運動と連動しつつ成立した演劇・舞踊の分野における前衛芸術の実験的実践は，学生運動の挫折と共に，1970 年代には，新しい様式を求めて，新しい活動を模索しはじめた．例えば，演劇においては地下劇場を主たる活動の場としていたアングラと呼ばれる演劇人達が大劇場に進出したり，あるいは，東京を離れて地方での活動を開始したり，古典を新しいスタイルで潤色上演したりした．この間，西洋流のアバンギャルドに強い影響を受けて「土方ジュネ」を名乗っていた土方巽も，1970 年を境として，西洋流の反芸術運動から，日本固有の土着的な肉体表現に強い関心を示すようになり，「東北歌舞伎」を標榜する舞踊実践を行うようになった．

このような変化は，日本のみならず世界的潮流として，一つには時代が前衛芸術に求めた思想が，政治的変革から精神的本質の探究へと変化したためであり，それに呼応して，都市を志向して地方から集まった芸術の担い手たちが，精神的に，あるいは，具体的行動として，自らの精神的根源を求めて中央から周縁へと散っていったからである．結果として，①前衛芸術が扱うモチーフは，物質的繁栄を基盤とする洗練された西洋・都市文化から日本の土着性を感じさせる日本・地域文化へと変化していった．併せて，②1970 年代，都市での反体制運動の挫折は，精神的な「痛み」と「後悔」をその底流に持ち，例えば電通と国鉄が仕掛けた「ディスカヴァー・ジャパン」に見られるように，若者の目を，精神を癒し，自己を発見する場所として田舎・地方に向けさせた．結果として，③1970 年代は，土方巽の「肉体の叛乱」（1968 年）から「疱瘡譚」（1972 年）への変化に端的に見られるように，1960 年代の反体制活動が持っていた都会的・普遍的で人工的な演劇性（シアトリカリティ）からローカルで土地固有性をもった民衆的表現へと展開していった．そして，この日本の固有性を取り入れた現代文化こそ，日本の独自性が西洋に認められ，積極的な海外進出を可能にした要因であった．

暗黒舞踏は，このような時代背景から影響を受けつつ，逆に同時代の芸術表現に強い影響を与え，さらに，時代のアイコンとして，この時代のある部分の雰囲気を凝縮的に表していると言える．そしてそこに，西洋にはない，日本独自の美意識と芸術観があったことは，後に西洋から舞踏が古典芸能と並んで日本固有の文化的達成と評価されたことが証明している．中央から地方への舞踏の展開を，時代と風土の中に置いてその独自性を明確にし，暗黒舞踏における肉体表現と内面表現の方法と展開を考察することは，ダンス研究に留まらず，日本の文化研究と 60～90 年代の時代の性格を明らかにする上で有効であると考える．そして，舞踏の普遍的価値を実証的調査によって確認し，その研究成果を国際的な場で発信していくことは，現代日本が生み出した日本文化の美的価値を世界に示すことに大きく資すると考える．

２．研究の目的

（１）舞踏の二重性を体現したものとしての北方舞踏派の研究．

本研究の一つの柱は，「北方舞踏派」をケース・スタディとして，舞踏の具体的な地方展開と本質的な二重性をフィールドワークと証言によって考究することである．

研究代表者は，これまで，舞踏に関する論文を公刊し，中嶋夏，ビショップ山田，小林嵯峨，雪雄子，上杉満代，大野慶人，笠井叡への長時間インタヴューを研究代表者による事実確認を経て学術雑誌において発表してきた．その中でも特に，ビショップ山田によって創設された北方舞

踏派については，*The Routledge Companion to Butoh Performance*（2018）への寄稿ほか，論文と国際学会発表によってその成果を公表してきた．これまで北方舞踏派を現地調査と証言を踏まえて総合的に扱った研究はなく，北方舞踏派自体，国際的には殆ど知られていなかった．この論文により，北方舞踏派の研究は緒についたと言っていい．そしてこれは北方舞踏派のみならず，地方における舞踏の伝搬の研究という点で独自の価値を持っている．ビショップ山田は，1972年に麿赤児らとともに大駱駝艦を創設し，舞踏家として独自の地位を築いたが，1974年に東北出羽山麓，現在の鶴岡市郊外に移住し，その地で「北方舞踏派」を立ち上げた．記念公演『塩首』（1975年，山形県鶴岡市北方舞踏派稽古場）は土方を大伽藍とし，麿赤児と大駱駝艦（室伏鴻，天児牛大，大須賀勇，田村哲郎），芦川羊子と白桃房，玉野黄市など当時の主要な舞踏家が出演した伝説的な舞台である．その後，ビショップは活動の拠点を北海道小樽に移し，シアター海猫屋（村松友視『海猫屋の客』に言及がある）を開場する．ビショップの北方での活動は1980年代前半まで続いたが，この活動は，舞踏の中の普遍性と土着性の共存という二重性を本来的・典型的に内包していると言っていい．なぜなら，舞踏は，当初は東京に集まった現代芸術家たちにより，現代芸術に関心を持つ都市観客を対象とした閉じた表現様式と見えながら，土方巽やビショップ山田のように，その核心的部分に地域文化を取り入れ，さらに具体的活動においても，精神的意味においても，日本国内のみならず海外にも広く「散らされて」いく潜在力を持っていたからである．この拡張・拡散は現在でも続いている．山形県鶴岡市に稽古場を設け，「北方」舞踏派と名付けることによって，ビショップは，舞踏の二つの重層性を実践において思考／試行したのである．本研究の目的は，この北方舞踏派の活動を克明にたどることで，舞踏に内在する二重性を明らかにすることにある．

（２）舞踏の二重性における女性舞踏手の役割．

本研究の二番目の柱は，「鈴蘭党」をケース・スタディとして，舞踏の二重性において女性舞踏手の果たした役割を明らかにすることにある．

雪雄子は，1972年にビショップ山田らと共に大駱駝艦の創設に参加し『陽物神譚』他に出演する．1974年にはビショップ山田と共に山形県羽黒山麓に向かい，北方舞踏派記念公演『塩首』に出演し，その後，小樽において女性だけの舞踏集団「鈴蘭党」を結成し，『それで世界は終わらない』（1977），『魚の臭いのする王女』（1977），『ホッケ考』（1978）ほか，活発な公演活動を行う．1984年には，土方巽の振付により『鷹ざしき』でビショップ山田と再び共演するも，『蝦夷面』（1989）で高い評価を受けて後，1993年には北方舞踏派から独立して青森県津軽に移住，『カリヨンの庭』（1998），『雪花巡礼』（2000）以降，青森に拠点を構え，国内外で舞踏活動を展開している．詩人吉岡実は，「塩首」に出演した雪雄子から喚起されたイメージを「.....栗飯／蝗／稗の穂はなびき／まるでゴヤの描く／紅服の美少年が出現する／地に乳は溢れ／〈物語〉（イストワール）のはじまり」（北方舞踏派《塩首》印象詩編「あまがつ頌」『サフラン摘み』所収より）と詠った．雪雄子で特筆すべきは，ビショップ山田同様，舞踏活動の基盤を，主として地方（特に東北）としながらも，女性だけの舞踏集団を創設したことにある．1970年代後半から高度経済成長は変質し，舞踏が，その新奇さだけでは受け入れられなくなるが，その時，舞踏集団を経済的に支え，芸術的，技術的レベルの維持を担ったのは女性舞踏手達である．舞踏は，都会性と地方性という空間的レベルだけでなく，個人の身体においても，人類が共通に持つ生命力を表現する舞踊芸術として世界に広がる普遍性を持ち，同時に，抽象化を拒む個人の肉体とそれを取り巻く環境を現場とするという意味で個別性・土着性を強く意識するが，女性舞踏手たちは，大衆劇場で自らの肉体を晒し，さらに全国を巡業するという現実において，肉体性を，男性舞踏手よりも切実に感じる状況に置かれたと言える．彼女たちの固有性は，移動する土着性にあった．舞踏が内包する普遍性と個別性の緊張感の中で女性舞踏手の雪がどのように感じ考えるのか．さらに，雪が土方巽を直接知るもはや数少ない女性舞踏手であるという事実も踏まえて，主とし

て，土方巽との関係，東北・北海道での鈴蘭党の活動を，キャバレーなどの大衆劇場での活動を入念に辿り，女性舞踏手たちの普遍性と個別性の問題について考究することが本研究の二番目の柱である．この際，小林嵯峨，上杉満代という雪雄子と同時代に活動を始めた女性舞踏手も視野に入れることになる．

３．研究の方法

本研究では，舞踏の本質に内在する二重性（普遍性と個別性，都市性と地方性）を「北方舞踏派」「鈴蘭党」そして，地方に強く意識する舞踏家たちの詳しい実態解明と歴史的意義を，直接証言を記述することで明らかにする方法，研究上映会という方法で全国的・国際的に発信して議論する方法，中心となる作品の詳細を分析と聞き取りで記述して明らかにする方法で，「舞踏」と「BUTOH」を結び合わせる糸口として，歴史的文脈における「東北」という文化的特性，および舞台表現を超えた身体哲学ともいうべき思想的普遍性の両者が，舞踏に内在している論点を明らかにする

４．研究成果

本代表者が研究助成を受けた，2020 年４月から 2024 年３月までに，本研究代表者は，本研究に関連する単著論文 10 点を公開した．このうち，９点は，本研究代表のテーマの構築に基づいて，草創期の舞踏家と対談を行い，それに事実確認を経て，編集作業を行い，対談者の確認も経て刊行したものである．これは，舞踏家の肉声を伝えると共に，舞踏は作品よりも舞踏家個人の個性と内面に属するという研究代表者の仮設を補強するものとなった．

このうち，①，③，⑥，⑧，⑩は，主として地方を活躍の拠点を置いている，あるいは，地方公演を行っている舞踏家たちのインタヴューである．いずれも土方巽や大野一雄を直接知る舞踏草創期に若手として活躍した経験と舞踏に対する考え方を語ってくれた．

また，２点（④と⑤）は，「鈴蘭党研究」として，かつて北方舞踏派に属し，今は第一線をしりぞいている女性舞踏家に話を聞くことができた．まず所在を突き止めるところから研究は始まったが，1970 年代の女性舞踏手の在り方，地方回りの実態についての貴重な証言となった．

調査報告として公開した共著論文②は，本研究の核心にある北方舞踏派『塩首』の記録映像を，ビショップ山田の全面的な協力を得て，詳細なディスクリプションと解説を行ったものである．場面の分析とそれに基づく，音楽や舞踏手を整理することで，北方舞踏派研究に新たな基本文献を加えたものと思っています．

また，研究助成を受けた 2020 年度～2023 年度は，まさにコロナ禍に日本中が席巻された時期であった．このような時期にパフォーミング・アーツはどうあるべきか？　という問題は，舞踏を含めて上演芸術研究に携わるすべての研究者が考えなければならない緊急の問題と感じた．そこで，二人の演劇プロデューサーと急遽対談することになった．この際，感染症予防への十分な安全配慮を行う必要があったが，対談者の理解を得て，対策を講じた上で実施することができた（⑦と⑨）．

さらに，本研究では，本研究テーマの主要対象である北方舞踏派の代表作『塩首』の研究上映会，および，1970 年代を代表し，舞踏芸術の形成に大きく貢献した，大野一雄『ラ・アルヘンチーナ頌』の記録映像を，慶應義塾大学アート・センターと，会場校であるケンブリッジ大学，慶應義塾大学および大阪大学の協力を得て実施することができた．これは，本研究の全国的，国際的展開においても大きな成果となった．実施場所は以下の通りである：(A)　英国ケンブリッジ大学クイーンズ・カレッジ（2021 年 12 月），(B)　慶應義塾大学日吉キャンパス（2023 年 12 月），(C) 大阪大学中之島芸術センター（2024 年 3 月）．この際いずれも，研究代表者によるポストトークと質疑応答をおこなった．

① （単著）大野一雄という生き方――舞踏家秀島実に聞く――」小菅隼人『日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション』55 号, 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会, pp.39-67, 2023.12.31.

② （共著）「《北方舞踏派結成記念公演》〈塩首〉（1975）調査報告」小菅隼人（筆頭）・石本華江『慶應義塾大学アート・センター 年報／研究紀要 30』慶應義塾大学アート・センター, pp154-165, 2023.12.15.

③ （単著）「「京都で踊るということ――舞踏家今貂子に聞く――」小菅隼人『日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション』54 号，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，pp51-73, 2022.12.31.

④ （単著）「「北方舞踏派・鈴蘭党研究（2）――舞踏家鈴木美紀子に聞く――」小菅隼人『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』37 号，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，pp175-203, 2022.06.30.

⑤ （単著）「北方舞踏派・鈴蘭党研究（1）――舞踏家緒環毘沙（長谷川希誉子）に聞く――」小菅隼人『日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション』53 号，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，pp35-62, 2021.12.31.

⑥ （単著）「土方最後の弟子――舞踏家正朔に聞く――」小菅隼人『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』36 号，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，pp160-216, 2021.06.30.

⑦ （単著）「コロナ時代の演劇について（２）――演劇プロデューサー高萩宏に聞く――」小菅隼人『演劇学論集：日本演劇学会紀要』72 号，日本演劇学会，pp73-104, 2021.06.15.

⑧ （単著）（査読なし）「金沢で踊り続ける――舞踏家山本萌・白榊ケイに聞く――」小菅隼人『日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション』52 号，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，pp55-92, 2020.12.31.

⑨ （単著）「コロナ時代の演劇について――演劇プロデューサー細川展裕に聞く――」小菅隼人『演劇学論集：日本演劇学会紀要』71 号，日本演劇学会，pp85-115, 2020.12.15.

⑩ （単著）「自然とともに踊る――舞踏家森繁哉に聞く――」小菅隼人『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』35 号，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，pp47-107, 2020.06.30.

以上，本研究助成によって，コロナ禍ではあったものの，舞踏家たちの協力を得て，研究は概ね順調に進んだ．但し，この間も，中嶋夏，天児牛大など，急逝されたため，対談を願っていて叶わなかった舞踏家がいたのは残念であった．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 小菅隼人	４．巻 39
２．論文標題 縒った肉体ーー舞踏家玉野黄市に聞く――	５．発行年 2024年
３．雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要：人文科学	６．最初と最後の頁 95-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小菅隼人	４．巻 55
２．論文標題 大野一雄という生き方ーー舞踏家秀島実に聞く――	５．発行年 2023年
３．雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション	６．最初と最後の頁 39-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小菅隼人，石本華江	４．巻 30
２．論文標題 《北方舞踏派結成記念公演》〈塩首〉（1975）調査報告	５．発行年 2023年
３．雑誌名 慶應義塾大学アート・センター 年報／研究紀要30	６．最初と最後の頁 154-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小菅隼人	４．巻 第37号
２．論文標題 北方舞踏派・鈴蘭党研究（2）――舞踏家鈴木美紀子に聞く――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要H-37：人文科学	６．最初と最後の頁 175-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小菅隼人	4．巻 第54号
2．論文標題 京都で踊るということ――舞踏家今貂子に聞く――	5．発行年 2022年
3．雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション	6．最初と最後の頁 51-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小菅隼人	4．巻 第36号
2．論文標題 土方最後の弟子――舞踏家正朔に聞く――	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『慶應義塾大学日吉紀要H-36：人文科学 』	6．最初と最後の頁 169-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小菅隼人	4．巻 第72号
2．論文標題 コロナ時代の演劇について（２）――演劇プロデューサー高萩宏に聞く――	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『日本演劇学会紀要：演劇学論集』	6．最初と最後の頁 73-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小菅隼人	4．巻 第53号
2．論文標題 北方舞踏派・鈴蘭党研究（1）――舞踏家緒環毘沙（長谷川希誉子）に聞く――	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『慶應義塾大学日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション』	6．最初と最後の頁 35-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小菅隼人	4．巻 35
2．論文標題 自然とともに踊る――舞踏家森繁哉に聞くー―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要H-35：人文科学	6．最初と最後の頁 47-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小菅隼人	4．巻 52
2．論文標題 金沢で踊り続ける――舞踏家山本萌・白榊ケイに聞く――	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション	6．最初と最後の頁 55-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Hayato KOSUGE
2．発表標題 “The Meaning of Hoppo Butoh School in the Shonai Area.”
3．学会等名 The Social World of Butoh Dance（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	石本　華江 (ISHIMOTO KAE)	慶應義塾大学・アート・センター・兼任所員	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	ケンブリッジ大学	クイーンズ・カレッジ		